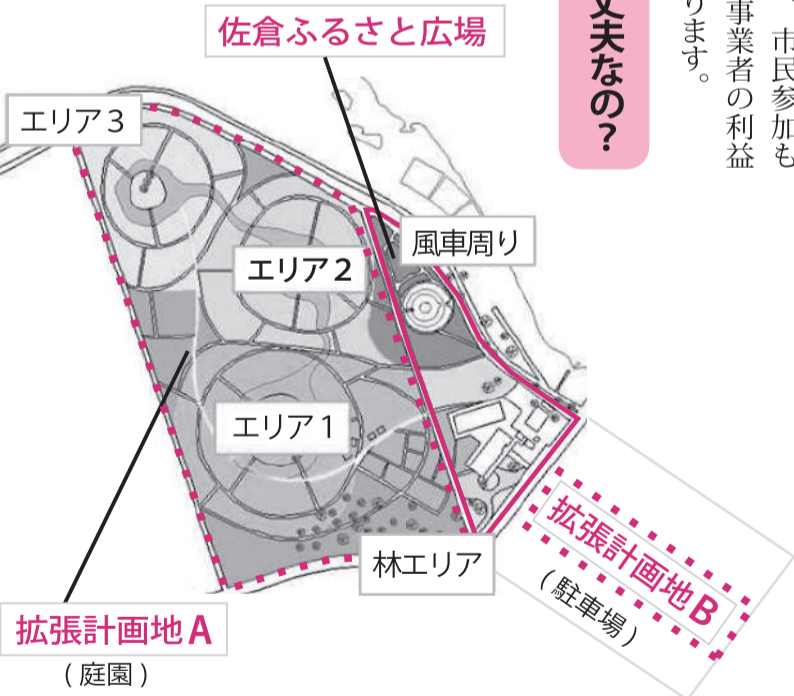




ふるさと広場「風車のひまわりガーデン」にて (7/31)
左から伊藤、松島、川口、五十嵐

試算では施設建設費は事業者の負担ですが、庭園と駐車場は事業者が1割、市が9割の負担としています。市はパークPFI導入のメリットとして、総事業費の12・6%の負担軽減や、来場者の増加等としています。しかし、これは年間47万人来場した場合であり、過大な見込みではないでしょうか。駐車料金は、常時500円を想定しています。

東邦病院裏の約74ヘクタールの(仮称)佐倉西部自然公園は、21世紀に里山を残すというコンセプトで進められてきましたが、市の姿勢が変わり、地権者との話がついた所から用地買収・民間活用が予定されています。



お金や運営は大丈夫なの？

最大の問題は、この計画に議会がほとんど関わらず、市民参加もなかったことです。事業者の利益優先が進む恐れがあります。

最大の問題は、この計画に議会がほとんど関わらず、市民参加もなかったことです。事業者の利益優先が進む恐れがあります。

さらに城址公園大手門跡広場や歴史人口の土地を、パークPFIで管理運営していく予定です。パークPFIの契約は最長20年なので、その間に事業が頓挫した場合、責任の所在は明らかにされていません。損害を市が穴埋めする可能性もあります。今後注視していきます。

市の公園に民間が参入

2017年の法改正で、市が管理する公園内に、民間事業者が飲食店や売店を建て、管理運営することができるようになりました。売り上げは民間事業者の収益になります。これをパークPFIといいます。

佐倉市の公園も、この制度の導入を計画しています。第1弾として、ふるさと広場の拡張計画を、6月に公表しました。

ふるさと広場大改造！

現在、毎年チューリップフェスタに向けて、球根を植える11月〜4月に、7万㎡の土地(図のA)を470万円、期間中の駐車場(図のB)を150万円で借りています。これらの土地を購入し、通年型の公園とする予定です。事業費は、施設建築に約5億円、通年型の庭園整備に約5億円、駐車場整備に約1億5千万円。さらに拡張部分の用地買収にどれぐらい費用がかかるかわかりません。

チューリップフェスタの会場となっている、ふるさと広場の隣の土地(図の拡張計画地A・B)は、これまで期間限定で借りていました。その土地をわざわざ買い上げて、観光拠点となる通年型の公園にする計画が公表されました。管理は民間事業者に任せる予定です。その計画とは…。

事業者の利益優先？

チューリップフェスタは一面のチューリップがみどころでしたが、今後区画を区切って植えるため、本数も減ります。市は来場者の滞在時間を増やし、佐倉市産の農産物を買ったり食べたりして、お金を落としてもらおう経済効果をお金落としてもらおう経済効果をお金落としています。散歩や気分転換にふらっと訪れていた市民の足は遠のくでしょう。

さらに城址公園大手門跡広場や歴史人口の土地を、パークPFIで管理運営していく予定です。パークPFIの契約は最長20年なので、その間に事業が頓挫した場合、責任の所在は明らかにされていません。損害を市が穴埋めする可能性もあります。今後注視していきます。

ふるさと広場はどうなるの？ 市民が望む公園を



市議
川口えみ

市民の声

これじゃ
納得できません

許進一

日頃、金がないと言って市民のための施策を後退させている佐倉市が、6月議会で川口議員の質問に答え、何と1億5千万円の支出を予定している「ふるさと広場拡張整備計画」を出してきた。用地買収はこれから、いくらかかるかも分からない。37億5千万円もかかる「モグラ図書館複合施設」がまだ建設中なのに…。

自宅に戻り、市のホームページにアクセスしたら、従来より検索しにくい画面に変えられ、四苦八苦してたどりの着いたら、「ふるさと広場整備計画」と関連する「緑の基本計画」が出ていた。何と、ふるさと広場も含め、市の主な公園に民間資本を投入する「パークPFI」制度を導入するという。

PFIのPは公金(税金)のPublicではなく、民間資金のPrivateである。にも関わらず、ふるさと広場の計画は、11億5千万円もの税金を先に投入することを決めた、いびつなものといえる。

また、公園をテーマパーク化する恐れも大きい。
今回の市のやり方は、モグラ図書館と同じく独断専行。情報を市民に公開するという時代の流れに逆行するものであり、到底納得できない。

